

弾き歌い初学者の苦手意識の変容

——保育者養成課程音楽授業におけるケーススタディ——

高須 裕美

要約

本研究は、保育者養成課程でピアノ初学者の学生が、授業の過程においてどのように弾き歌いの苦手意識から抜け出していくのかを明らかにするものである。研究協力者1名に対して、各授業における体験と語彙記述による意識調査、参与観察を行い、その心理的プロセスにおける変容をサトウ（2009）が述べる複線経路・等至性モデルを参考に分析することを試みた。その結果、この事例における苦手意識から抜け出す過程では、「弾くことと歌うことの同時行為が維持できないために起こる段階」「弾くことと歌うことのどちらかの行為に起こる段階」の2段階に分けられた。またピアノ初心者である研究協力者は、技術的な解決方法が分からず、苦手意識を軽減するために、エラー（間違い弾き）を繰り返し強化する期間があったことも明らかになった。このような苦手意識を緩和させていく過程においては、指導者が足場掛けとして、一定期間、学生と一緒に歌う行為を繰り返し、出だしのタイミングや音程のピッチマッチングの経験を取り入れて積み重ねていくことを提案した。実際に子どもが歌いやすい弾き歌いを受講者がイメージするために、子どもの歌唱の発達を見通して考えることによって、弾き歌いの捉え方が変化するような指導の可能性が苦手意識の緩和につながることを示唆した。

I. 問題と目的

「弾き歌い」は、現在の保育士国家試験実技科目「音楽」にも長らく設定されており⁽¹⁾、保育者がピアノ伴奏で子どもの歌をリードし、子どもが歌うスタイルは、現在も保育現場では一般的な歌う活動の一般的な形態として継続されている。しかし、保育を学ぶ学生にとって、ピアノを弾きながら歌う活動は苦手意識を持つ者が多く、ピアノ初学者の割合も増え続けている（扶瀬、2017）。したがって、ピアノ初学者である保育学生にとって、弾き歌いに関わる科目は、緊張や不安を緩和しながら乗り越えていかなければならないハードルの高い科目の1つであると言えるであろう。このような保育学生の現状について議論する必要がある。

音楽の苦手意識に関わる研究を2000～2024年に限定して、論文検索エンジン CiNii で検索すると、それに関する学術論文は2件見つかった。その1件は、ピアノを弾くことへの苦手意識を克服するために、コードネームと即興性を取り入れた解決策を提案しているものであった（辻井、2019）。この研究は一般的な音楽愛好家や音楽を専攻する者を対象にしているものであり、演者がピアノを弾けるようになることの実践策を提案するものであった。もう1件は、子どもの音楽づくりに対する苦手意識を払拭する小学生を対象とした試みとしたものであったので、関連性が

無いものであった。これらのことから、保育を学ぶ学生の、音楽に対する苦手意識に関しては、これまでの研究課題として大きく注目されておらず、現代の保育学生の実態に沿う指導や専門性を検討しなければならない事項であると言えるであろう。

保育者の弾き歌いは、演奏者が実際にピアノを弾くだけでなく、子どもの声に合わせて「弾きながら歌う行為」を伴うものであり、子ども自身の声を聞きながら演奏する側面を持つ。保育を学ぶ学生は、この「弾き歌い」の準備にかなりの自習時間を費やして準備している。しかし、日頃のレッスンや就職試験などの肝心な場面で、日頃の練習でのパフォーマンスが発揮されず、苦手意識を持ち続けたまま保育現場に入っていく。このような保育者の弾き歌いに関わる苦手意識は、子どもが歌う活動から遠ざけられたり、表現活動そのものが造形的な活動へ傾倒することも考えられる。したがって、増え続ける初学者が、子どもと歌うことを敬遠しないためにも、彼らの苦手意識を払拭していく養成教育での学修経験は、必要不可欠である。

本研究では、経路の個人的な類型を深く把握するために、データの分析方法としてサトウ(2009)述べる心理的プロセスにおける変容を複線経路・等至性モデルを参考に分析することを試みた(以下、TEMとする)。対象は弾き歌い初学者で、学修経験のプロセスを図にする。そして、TEMを参考に作成した心理的なプロセスをもとに、受講者は、授業においてどのような心理的変容が起きているのかを考察した。それらに対して、指導者が助言できる手立てと受講者の苦手意識の克服に向けた仮説を検討する。

II. 方法

1. TEM についての概要

データの分析方法として参考にした TEM において用いられる概念の説明、及び、本稿における意味について述べる。まず、「必須通過点」とは、多くの人が、ある地点からゴール地点までに通らなければならない通過点として位置付けられている。本稿に置き換えると、演奏に苦手意識を感じていることが多くの弾き歌い初学者の広い意味の前提として考えられるため、必ず通らなければならない地点として設定した。

次に、等至点とは、多様な経路が収束する地点のことを指し、研究上焦点化される部分である。これは、対象者にとっても重要な行為や経験となる地点であるとされている。また、等至点と対になる地点として「両極化された等至点」が設定されている(サトウ・安田・木戸・高田・Valsiner, 2006; サトウ, 2009)。

本稿は、語りではなく記述記録を主軸にして分析することとし、研究協力者の背景については面接で尋ねることとした。等至点は、「苦手意識から抜け出すきっかけとなる経験」として設定し、1事例をサンプリングする。そして、この等至点から始まる研究対象者の事例について、図から見える心理的なプロセスを検討した。保育者養成校において、この研究協力者を含めて6人のグループに対し、X年4月～X年7月までの4ヶ月間、15回にわたって授業を行った。授業は各回90分ではあるが、指導者である筆者が1人で担当した。グループメンバーの研究協力者には、倫理審査を受けた内容を提示し、研究協力について署名を得た。今回は、研究協力者であ

る I さんの各回を受講した感想の記述内容と、筆者である教師の参与観察をもとにその意識の変容について分析した。

I さんを事例として、本稿では、サトウ (2011) が提案した 1/4/9 の法則を参考に 1 名を調査することとした。本授業は個人レッスンの形態を取っており、1 回の授業において、1 名の持ち時間は 10 分程度であった。レッスンの授業内容の経過は、表 1 の通りである。

表 1. I さんの授業内容の概要

回数	内容
第 1-3 回	声量を意識するために教師と一緒に歌う経験
第 4-6 回	保育実習での実践に向けた弾き歌いの準備
第 7-9 回	体調不良、歌いながら弾く難しさを実感する
第 10-11 回	鍵盤を見ずに楽譜を見て弾くようになる (目線移行期)
第 12-13 回	試験に向けた弾き歌い準備
第 14 回	声量コントロールの不安期
第 15 回	部分的にのびのび歌う

2. 研究協力者の背景

大学入学時まではピアノ経験の無いピアノ初學者を調査対象とした。調査対象者の抽出理由は、同意を得られた者の中から、定期的な授業に毎回参加している欠席回数の無い受講者であったことである。調査対象者 I さん (仮名) は、授業受講時 19~20 歳であった。ピアノ初學者の中には、ピアノ経験はないものの、合唱団にも所属し歌うことが得意である、吹奏楽経験がある、などの音楽を嗜む経験を重ねている場合がある。本稿の研究協力者である I さんは、「吹奏楽経験があり、母親が幼児期に多く歌を歌ってくれた」といった幼児期の育ちの背景があり、弾き歌いに関しては苦手意識を持つものの、音楽に対する抵抗感はそれほど高いわけではなかった。

III. 結果

1. 記述記録と参与観察の経過

教師と学生と一緒に歌う経験 (ピアノを意識すると同時に歌えない) (第 1-3 回)

弾き歌いの授業の導入として、課題の数曲と一緒に歌う活動を実践した。第 1 回の授業後には、以下のような振り返りがあった。

「先生と一緒に歌ってくださって声を出す練習が出来たので、1 人でも声量が出るよう意識しながら練習したい。次の課題曲の『思い出のアルバム』では、歌に集中できるよう、なるべくピアノはすらすらと弾けるように練習したい。(第 1 回授業後の記述より)」

授業担当である筆者は、授業初期には主導で歌唱をリードすることで受講者に意識付けできるように接していた。I さんは、ピアノを弾くことに精一杯になっており、弾き歌いが成立しない

部分が曲の半分程度あった。声が出ていない部分は歌唱を補うような形で、教師だけが歌っている時もある。このような技術的な課題を解決させるために、教師の運指と声を確認できる動画を作成し、運指と声のタイミングを事前学習できるような教材を提供した。Iさんは、ピアノと歌が同時進行できないことに苦戦していると話したが、詳細を説明できるほどリラックスした様子ではなく、緊張した面持ちで一生懸命弾こうと努力していた。

保育実習での実践に向けた弾き歌いの準備（第4-6回）

子どもの前で弾き歌いする教材に取り組んだ。子どもの歌唱は、歌詞のまとまりを理解することによって、曲をイメージすることに発展すること、加えて、子どもの息は大人ほど長くないことを伝えたことから、ブレス（息継ぎ）の位置を確認した。さらに、スムーズに弾き続けるための運指を確定、ピアノで跳躍する音はペダルを踏むことを検討した。学生の記述記録には、子どもと一緒に歌うことを想定した記述が出現し始めている。

「実習の事前訪問で頂いた楽譜を今回初めてレッスンで、ペダルや弾き方などを教えて頂いたので、来週の実習直前レッスンまでにしっかりと練習しようと思いました。また、どのようにメロディーを弾いたら子どもが歌いやすいかなども考えながら練習に臨みたいと思います。（第4回授業後の記述より）」

「実習に向けて楽譜の練習をし、ポイントに気をつけながら弾くことができるようになってきたので、本番で、たとえ間違えたとしても演奏を続けられるように意識して臨みたいと思いました。今後もどんどん曲に挑戦して、弾ける曲を増やしていくことが課題だと思います。（第6回授業後の記述より）」

この頃の授業回より、Iさんからは弾き歌いに対する意欲や、保育実習を控えて専門性を考える意識が定着しつつある様子が見受けられた。これらの記述は、子どもの前で弾き歌いをする姿の構想状態であるようにも読み取れる。

少し難しい曲に挑戦する（第7-9回）

この時期は、初めての保育実習を終えて再び大学に戻った授業期間にある。Iさんは、実践現場で保育実習生として子どもと歌う活動を実際に経験したことがきっかけになり、少し難しい曲にも挑戦したいと意欲を見せるようになった。このことから、右手が旋律と違うリズムを持つ歌唱曲にも取り組み始めた。

「(抜粋) 少し難しい曲に挑戦し、目標を高く持とうと思いましたが、まだまだ練習が足りないなと感じました。他の2曲も細かいポイントやリズムを見逃しており、弾けていなかったのので、しっかり練習したいと思いました。（第7回授業後の記述より）」

「(抜粋) 新しい曲や、今、挑戦している曲を練習しながらも試験候補曲を練習したいと思

ました。歌いながら弾くという行動があまりできていない部分があるので、なるべくピアノを弾くことに意識が集中しすぎないようにしたいと思いました。(第9回授業後の記述より)」

弾き歌いに対する学修意欲が高まって自主練習も積み重ねてきていたが、やみくもに歌うことを意識した練習を繰り返すことで、見当違いのリズムを気付かず歌い続けていたり、音違いのまま弾き続けられていたりする部分が発見され、「不安な部分が多い」と表現した。このように、Iさんの弾き歌いに対する意識が、順調に上がったかのように思われたが、体調不良によりうまく声のコントロールができないことも重なり、再び下がってくる時期となった。ピアノ初学者ゆえに、どこがどのように間違っているか自分自身で判定できないことも不安の要素になっていることが、参与観察された。

目線が鍵盤から楽譜へと移行する時間が長くなる (第10-11回)

この時点では、やや難しい曲も完成させることができるようになった。Iさんが歌唱を忘れてピアノだけを弾くというような演奏は無くなった。さらに、筆者と一緒に歌う意味合いが、歌のタイミングやピッチを合わせていくためのものではなく、音量を上げたり、ブレスの場所を合わせたりするためのものへと変化していった。

「(抜粋) 新しく取り組んだ『お正月』が、左手の和音を間違えやすいので、楽譜をよく見て正しく弾けるようにしたいと思いました。(第10回授業後の記述より)」

これまでは、楽譜を読みながら弾くことは困難であったため、指の場所を覚えて鍵盤を見ながら弾く仕草があったが、目線が楽譜に移る時間が増えたことから、鍵盤の指の場所や運指が安定するようになってきたことが推察される。

ピアノと歌唱にそれぞれの課題を持つ (第12-13回)

この授業の試験曲となる課題を中心に学修した。細やかな技術的なエラーは修正が終わっており、歌唱と伴奏のバランスを調整するような学修段階であった。

「試験が近づいてきたので、歌うことに集中しすぎてピアノが蔑ろにならないよう、楽譜の暗譜を意識して練習に取り組みました。声の出し方も、よく掠れた声で歌い始めるので、前奏の部分では最後の1拍でしっかりと息を入れて、全ての息を使うようにして歌えるようにしたいと思います。(第13回授業後の記述より)」

この頃から、歌唱の課題と、ピアノ伴奏に関する課題が明確に分けられるようになるという変容が見られた。さらに楽曲全体に関わる指摘へと変化している。また、Iさん自身の内在した弾き歌いの課題が、自分自身の言葉でこれまで以上に細かく語られるようになる。

人に見られる緊張から声が出にくくなる（第14回）

試験を前にして、授業で試演会を実施した。Iさんを含めたグループメンバーの前で、複数の曲から1曲が指定され、9名程度の学生同士が弾き歌いを披露する場である。

「声量がリハーサルの際はあまり出ず、後のレッスンの際にやっと少し出るようになったので、本番では初めからはっきりとした声で歌えるようにしたいと思います。（第14回授業後の記述より）」

練習の時は歌えたのに、本番で思うように力量が出せないという状況であった。この段階では、技術的な練習ではなく、気持ちの持ちようで変われると自覚しているのか、練習あるのみといったような振り返りの語句は見られなかった。

一部に達成感を持った演奏ができた（第15回）

最終回は、試験でもあり、審査員や9名の受講生の前で弾き歌いをする場であった。

「(抜粋) 試験で実際に演奏をしてみて、前回のリハーサルよりも(曲の)前半が、少し声が出なかったと感じました。それでも後半はのびのびとはっきりと歌うことを意識して取り組むことが出来ました。『めだかの学校』の最後の二小節の指が、少し音がならなかったの、悔しさが残りました。(第15回目授業後の記述より)」

この振り返りでは、Iさんの力量が全て発揮できたという感じにはならなかったようである。しかし、授業スタート当初の「すらすら弾けるようになりたい」という段階は、すでに達成しており、細かい部分のこだわりが記述に出てくるようになった。また、曲の前半の声量から立て直しを図り、後半ではのびのびとはっきり歌うことを意識できたという粘り強さが弾き歌いからも伺える演奏へと成長した。Iさんの記述からは、部分的な達成感と共に、もう少し完成度を上げたかったという今後の課題が表現された。

2. TEM図から見る変容

Iさんの授業経験プロセスから、個人の体験と文脈の流れをTEM図で書き表した。この図は、Iさんが辿ってきたこれまでの経験を左から右に時間軸で視覚化したものである。

当初に設定した「苦手意識から抜け出すきっかけとなる経験」を4つの出来事に焦点化し、前半の授業期まで続いていた苦手意識を持続した状態と、少し緩和された(抜け出した)状態までの2つの過程に分けて描き出した(図1)。

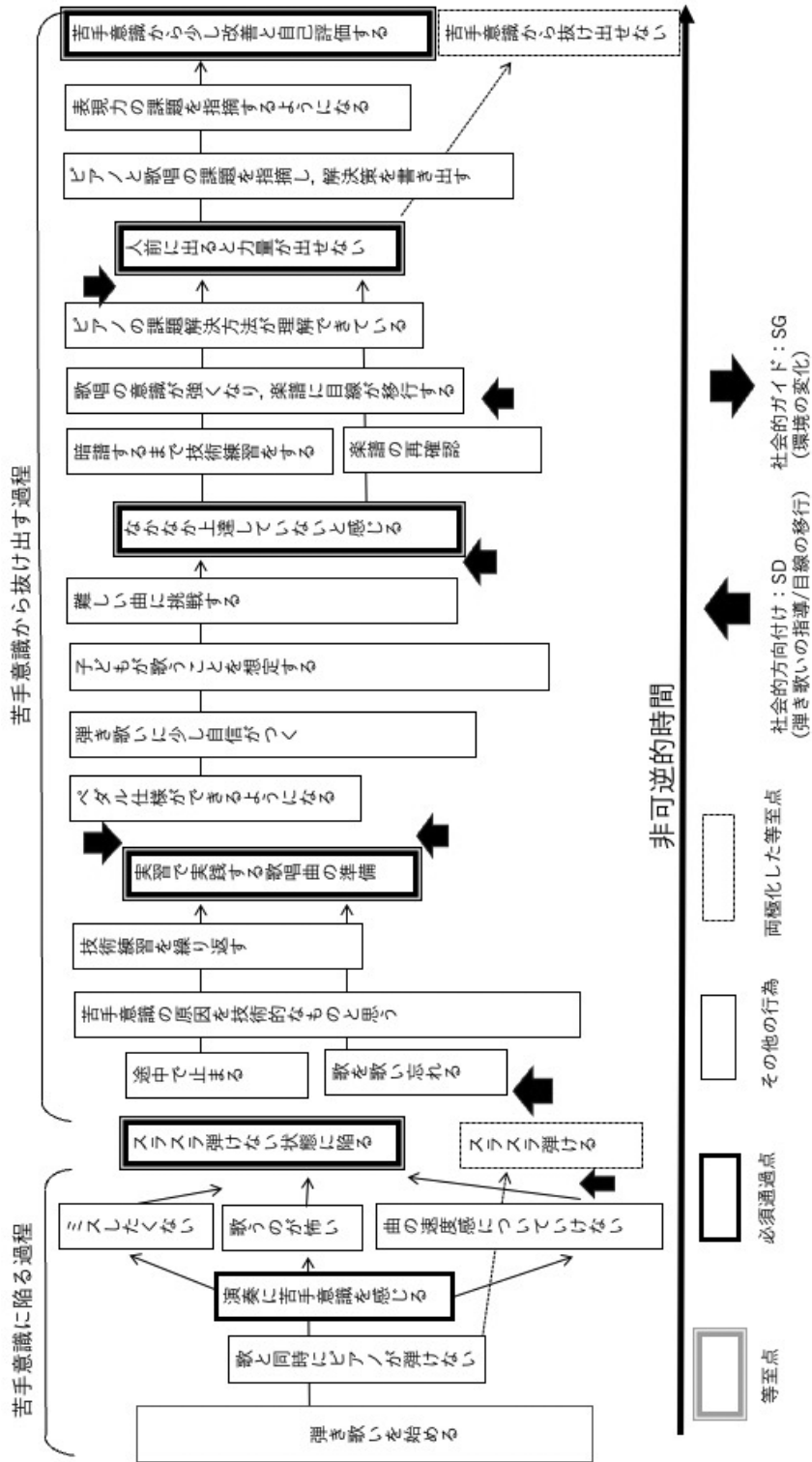


図 1. 1 名の体験と心理的プロセスの TEM 図

IV. 考察

1. 苦手意識に陥る過程

本事例の経過から、第1回から第15回の授業における記述の変容と観察を考察する。Iさんは、弾き歌いについての苦手意識は強かったと思われるが、「歌を意識したい」「すらすら弾けるようになりたい」といった内容が記述されていた（第1～3回）ことから、歌の重要性を意識できていなかった気づきと、「歌うこと」と「弾くこと」を同時進行させることが困難なために音楽全体につまずき、止まってしまうという流れが挙げられた。弾き歌い初学者が、「ミスしたくない」「歌うのが怖い」「曲の速度感についていけない」というような症状を抱え、歌唱とピアノ演奏を同期させていく手段が分からないまま音楽を避ける過程を辿ってしまうことも考えられる状態が考察された。

このような苦手意識を払拭させていく過程として、指導者は弾くことと歌うことの同時行為を支えるために、一定期間「受講生と一緒に歌う行為」を繰り返し、歌い出しのタイミングや、音程のピッチマッチングの経験を積み重ねていくことが一つ的手段として考えられる。例えば、教師が歌唱、受講生が伴奏を弾く場面や、教師が歌唱と左手伴奏、受講生が歌唱と右手などがあっても良いであろう。つまり、これらはアンサンブルのような経験を教師と受講生の弾き歌いで実践することから面白さを体感してもらうことである。教師が受講者と伴奏や歌唱を同期できる場面を増やしていくことは、あまり苦手意識を感じることなく抜け出していく可能性があるのではないかと考えるからである。

2. 苦手意識から抜け出す過程

次に、苦手意識から試行錯誤しながら抜け出す過程を見ていく。サトウ（2009）の述べる等至点として設定した「苦手意識から抜け出すきっかけとなる経験」は、まず、子どもの前で実践する準備期（第4～6回）が、挙げられる。そこでは、プラス思考の振り返り記録が見られるが、その後のIさんの振り返りには、「難しい曲に挑戦する（第7～9回）」、「人前で弾く（第14回）」において、「難しい」「あまりにもできていない」などマイナス思考な記述に変容しており、浮き沈みを繰り返しながら時間軸を移行している。

少し難しい曲に挑戦する（第7～9回）際には、リズムや音のエラーに気づかないまま技術練習を繰り返し、そのまま強化させている時期も観察された。Iさんのようなピアノ初学者は、自分自身で間違いに気づいて修正することが難しい場合があることも考慮する必要がある。例えば、教師には、運指やブレスの場所、旋律やリズムを予め確認できるような動画を作成したり、テンポを落としたり、リズムを取り出して学修したりする細やかな対応が求められるであろう。

しかしながら、技術面では、目線が鍵盤から楽譜へと移行する時間が長くなる時期（第10～11回目）に、歌唱とピアノの同時行為への課題は無くなり、弾くことと歌うことへの課題が、明確に記されるようになった。このことから、「目線の移行期」は、「苦手意識から抜け出すきっかけ」として、もう一つの技術的な山を一つ乗り越えたような次の段階へと変化していく出来事になったことが考察された。

3. まとめ

この事例の結果から、Iさんに関しては、技術的な上達が足場掛けとして作用し、最終的には、苦手意識が少し改善されたという自己評価に至った。しかし、「人前で弾く（第14回）」など、いつもと違う場所や人的環境の変化によって、弾き歌いの力量が発揮できないといったような経験も苦手意識から抜け出す過程での足かせになっている可能性が考えられる。技術面での課題を乗り越えたとしても、大勢の人々の前で注目されることや、同僚の前では表現することに躊躇する保育者も存在するからである。Iさんのケースでは、その原因が技術面ではなく精神的なものであると理解した上で本番を迎えていることを踏まえると、技術だけではなく、心持ちによって苦手意識を払拭できる可能性も考えられる。

弾き歌い初学者の苦手意識の大幅な変化は、短期間では大きく見込めないが、指導者の前向きな評価に加えて、子どもが歌いやすい弾き歌いを検討するといったような知識の学びによっても、保育者としての自覚や専門性が芽生えるような学修環境が作られると考えられる。本稿はケーススタディであったため、複数の体験を比較し類型化することが必要である。

注

- (1) 一般社団法人 全国保育士養成協議会 令和6年試験案内 <http://www.hoyokyo.or.jp/exam/guidance/> (閲覧時2024/01/03)

引用文献

- 扶瀬絵梨奈 (2017) 「保育の表現技術「音楽I」における専門的技術に関する考察—ピアノ演奏時の視線行動の熟達差を通して—」, 名古屋柳城短期大学研究紀要 39, 313-331
日本保育者養成協議会 <https://www.hoyokyo.or.jp/exam/guidance/practicalexam1.html> (閲覧時2024/01/04)
- 辻井直幸 (2019) 「簡易伴奏のための合理的なピアノ（鍵盤楽器）演奏方法—コードネームを基にした即興伴奏へのアプローチ—」, 奈良学園大学人間教育学部人間教育 2 (11), 253-262
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・Velsiner, J. (2006) 「複線経路・等至線モデル—人生経路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して—」, 質的心理学研究, No. 5, 255-275
- サトウタツヤ (2009) 『TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして—』誠信書房

付記

本研究は、科研費（23K02326）の助成を受け実施したものである。

(受理日 2024年1月5日)